

シュンギク（菊菜）カルテック農法・施肥例

(10アール当り)

時期	方法	資材
地力作り [元肥]	右記を同時に全面に散布して均一に耕やし、ウネを整地します。播種までになるべく長く日数をおくこと。(理想的には20日以上)	<p>ラクトバチルス600g…保水性・排水性がよく、肥沃な地力を作ります。 ※一作を終えると土壌微生物群も消耗していますから、作付けごとに菌を投入して堆肥を土ごと醗酵させる事を推奨します。</p> <p>堆厩肥 500kg以上 (年間2トンほど)</p> <p>硫安 60kg (もし通常の複合肥料ならN:14kg程度で、特に日数をおく) ※カルテック農法を継続している場合、ハウスでも無機肥料成分の残留が少ない(EC:0.2)ので 減肥しません。ただし前作がカルテック農法でなく チッソが特に多量に残留している場合(EC:0.5以上)は チッソ施肥量を2/3程とし、カルシウムを増量します。 ※地力作りから播種までに日数の余裕が無い場合は、上記の材料を別に予め積み込みして醗酵させたボカシ肥の施用をお勧めします。 ※何れのやり方でも 播種時には土壌EC:0.2前後とします。</p> <p>畑のカルシウム 60kg(前後) ※土壌pH6.2程度となるように量を増減して下さい。 ※カルシウムが効いたシュンギクは 根が白くキレイで、葉が厚く、ツヤがあり、特有の旨味と香りが強く、鮮度を長く保ちます。当然、カルシウムやビタミンC、β-カロテンも豊富です。</p>
播種時	播種・覆土後の灌水の時(充分に灌水)	<p>濃縮酵素 500倍液…出芽と根張りを均一に揃えて促進。 ※通常、播種後に充分に灌水し、この時10アール当り2リットル程度を与えます。希釈倍率は500倍(以上)ですが、水量により適宜で構いません。2～5日で揃って出芽し、萎黄病にも強くなります。 ※これ以後は灌水しません。もし土が乾き過ぎたり、根張り・生長が不均一で良くない場合は、調節の意味で中期(15日)までに一度、濃縮酵素を混ぜて灌水します。この時はすでに葉がありますので、希釈倍率は500倍(～1000倍)とします。</p>
生育途中の調節	葉面散布 2つの液の葉面散布を適宜、使い分けてコントロールします。	<p>濃縮酵素 500倍液を葉面散布 ※通常、本葉展開後に散布し、根張り・生長を強く促進します。 ※以後15日経過したら、2度目の散布をするのが効果的です。 ※ただし何時でも、生長を進めたい時には酵素液を葉面散布。 ※特に秋蒔きの場合は 初期にしっかり根を作って生長させる。 ※低温で生育が停滞し、花芽分化(抽ダイ)も心配な時は 酵素液散布。(抽ダイさせないためには、初期に肥料過多にせず、根の力で生育を進めること。 中盤以降に根を衰弱させないこと。)</p> <p>カルテック Ca液 500倍液を葉面散布 ※本葉2枚展開以降に散布して、生育の引締め・病害対策。 ※以後15日経過したら、2度目の散布をするのが効果的です。 ※ただし何時でも、チッソ過多や、葉が薄く、広く伸びすぎ、軟弱な時、早すぎる生長を締める時には カルシウムを葉面散布。 ※特に春蒔きの場合は 徒長させないように カルシウムを優先。 ※寒期にかかる前に散布しておく、寒害に強くなります。 ※原則として上記2種の葉面散布は3日以上あけて交互にします。 ※もしチッソ肥効が少なすぎ、葉色が薄く、生長が悪い(ただし根は強い)場合は アミノ酸500倍で葉面散布します。</p>
仕上げ	収穫前7～2日、葉面散布	<p>カルテック Ca液 500倍 ※葉を厚く充実させ、糖度・旨味・香りを増し、鮮度を長く保ちます。</p>